

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

## ナンテン *Nandina domestica* Thunb. (メギ科 Berberidaceae)

正月の生け花などに良く使われるナンテンは、中国原産で中国および日本の南部に自生し、古くから庭木として玄関前などに植えられる高さ1~2mの常緑低木です。幹は数本そう生して直立し、葉は独特の姿をしており、大型の数回羽状複葉で幹の頂部にかたまって互生します。小葉は長卵形から広皮針形、先端が少し突きだし、革質で深い緑色、ややつやがあり、葉柄の基部は茎を少し抱いていて、6月ごろ茎頂から大型の円錐花序を出し、細かく分枝して多数の小白花をつけます。晩秋から初冬にかけて赤い球形の液果をつけ、花穂は重みでややたれ下がり、白い実のものを特にシロミナンテン *N. domestica* Thunb. forma var *leucocarpa* Makino とよび、赤実のものは葉茎ともやや赤味を帯びています。果実をナンテンジツ (南天実, *Nandinae Fructus*) よび、漢方で鎮咳薬として喘息や百日咳に用います。成分としては果実にアルカロイドの *domestine* (ドメスチン)、樹皮に *nandinine* (ナンジン), *berberine* (ベルベリン)、茎には *magnoflorine* (マグノフロリン)、種子には *protopine* (プロトピン) などが含まれています。



写真1 ナンテン (花)



写真2 ナンテン (果実)

江戸時代に様々な葉変わり品種が選り出され、盛んに栽培されたようで古典園芸植物として現在もその一部が保存栽培され、錦糸南天とよばれる園芸種のおたつくナンテン (オカメナンテン) は葉が紅葉しやすく真夏でも赤い葉をつけ、実がつかないのが特徴で、高さも50cm程度しか伸びず、下草などと一緒に庭園によく植えられています。稀に太く育った幹を床柱として使うことがあり、鹿苑寺 (金閣



写真3 シロミナンテン (果実)



写真4 ナンテンジツ (南天実)

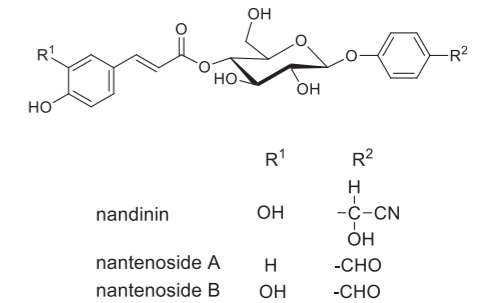
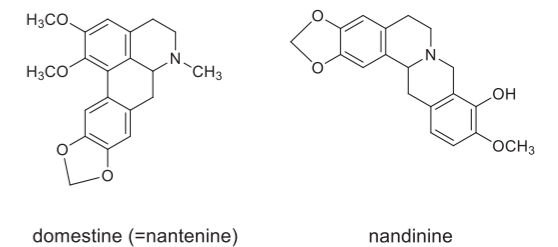


図1 成分 (domestine, nandinine, nandinin, nantenoside A, B) の構造式

寺)の茶室、柴又帝釈天の大客殿などで見られます。音が「難転」即ち「難を転ずる」に通じることから、縁起の良い木とされ、フクジュソウ (福寿草) とセットで、「災い転じて福となす」といわれ、鬼門または裏鬼門に植えると良いとされています。葉は生薬のナンテンヨウ (南天葉, *Nandinae Folium*) で、健胃、解熱、鎮咳などの作用があり、葉に含まれる成分の分解物であるシアン化水素は猛毒ですが、含有量はわずかであるために危険性は殆どなく、食品の防腐に役立つことから彩りも兼ねて弁当などに入られます。葉は民間的に魚毒を防ぐと伝承され、葉の成分である nantenoside B (ナンテンノシド B) をリード化合物として抗アレルギー薬のトラニラスト (リザベン®) が開発され、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、ケロイド、アレルギー性結膜炎などの治療薬として用いられています。

注) nandinine はアルカロイド、nandinin は青酸化合物 (シアンヒドリン) です。